

2021 年度 入学試験問題

国 語

(第 1 回)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校

【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私たちの祖先は海にすんでいた。何億年も前の私たちの祖先は、魚だったのだ。その魚の一部が陸上に進出して、私たちに進化した。もちろん陸上に進出するためには、体のいろいろな部分を変化させなくてはならなかった。

【図1】の系統樹Aは、脊椎動物から六種（魚類のコイ、両生類のカエル、爬虫類のトカゲ、鳥類のニワトリ、哺乳類のイヌとヒト）を選んで、それらの進化の道すじを示した系統樹である。陸上生活に適応する進化的変化はたくさん起きたが、その中の三つを黒い四角で示してある。

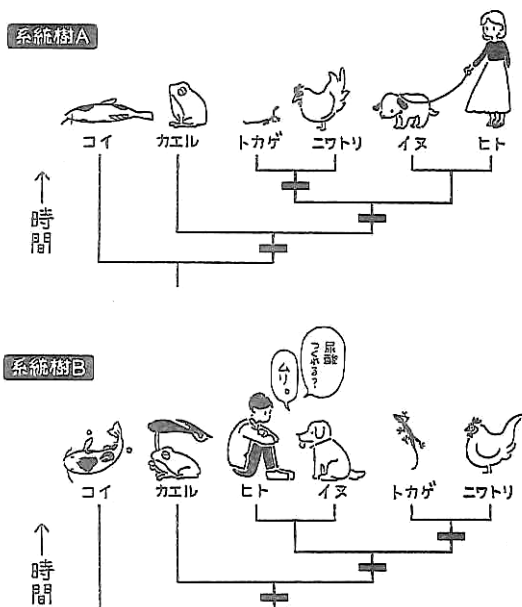
脊椎動物の体はたくさんさんのタンパク質できている。そして古くなったタンパク質は分解されて体の外に捨てられる。タンパク質が分解されると、どうしてもできてしまうのがアンモニアである。

アンモニアは有害な物質なので、体の外に捨てなければならぬ。でも、昔はとくに困らなかった。私たちの祖先は魚類であり、海や川にすんでいたからだ。体のマワりに大量の水があるので、アンモニアを捨てるために水がいくらでも使えたからである。

しかし、陸に上がった両生類には、そういうことができない。陸上には水が少ないので、なかなかアンモニアを捨てられない。でも、アンモニアは有毒なので、あまり体の中に溜めておけない。そこで、とりあえずアンモニアを尿素に作り変えるように進化した。これが系統樹の中一番下の黒い四角である。尿素も無毒ではないが、アンモニアよりは毒性が低いので、ある程度なら体の中に溜めておくことができるのだ。

それでも両生類は、水辺からあまり離れて生活することができない。その理由の一つは、卵が柔らかくて、すぐに乾燥してしまうからだ。だから、ほとんどのカエルは卵を水中に産む。水辺を離れて生活するためには、つまり、さらに陸上生活に適応するためには、卵が乾燥しない工夫をしなければならぬ。

その工夫を進化させた卵が羊膜卵である（真ん中の黒い四角）。羊膜卵とは、簡単にいうと、羊膜で作った袋の中に水を入れ、その中に胚（発生初期の子ども）を入れた卵である。



【図1】二つの系統樹

袋の中の水に、子どもをポチャンと入れておけば、乾燥しないからだ。さらに卵の外側に殻からを作
って、乾燥しにくくしている。この羊膜卵を進化させた動物は羊膜類と呼ばれ、水辺から離れて
生活することができるようになった。この初期の羊膜類から、爬虫類や哺乳類が進化したまちが
えやすいが、爬虫類から哺乳類が進化したわけではない。そしてさらに、爬虫類の一部から鳥
類が進化したのである。

爬虫類や鳥類にいたる系統では、さらに陸上生活に適した特徴とくちょうが進化した。尿素を、尿酸に作
り変えるような進化が起きたのである（一番上の黒い四角）。

尿酸も尿素のように毒性が低い。でも尿酸には、その他にもいいことがある。尿酸は水に溶け
にくいので、捨てるときにほとんど水を使わなくていいのだ。

陸上にすんでいる動物にとって、水を手に入れるのは大変なことである。だから、水はなるべ
く捨てたくない。それなのに、私たちは結構たくさん尿を出して、水をたくさん捨てている。
もったいない話である。一方、ニワトリやトカゲは、尿をあまり出さない。ニワトリやトカゲが、
イヌみたいに大量の尿を出している姿を見た人はいないはずだ。それは、尿素を尿酸に変える能
力を進化させたからである。

つまり、哺乳類は両生類よりも陸上生活に適しているが、爬虫類と鳥類は哺乳類よりもさら
に陸上生活に適しているのである。

ところで、【図1】の系統樹Aと系統樹Bは、同じ系統関係を表している。しかし、見た目の
印象はだいぶ違う。よく目にするのはAのような系統樹だ。これだと、ヒトは進化の最後に現れ
た種で、一番優れた生物すくであるかのような印象を受ける。

しかし陸上生活への適応という意味では、Bのような系統樹の方がわかりやすい。トカゲやニ
ワトリの方がヒトより陸上生活に適しているからだ。系統樹Bを見ると、ニワトリが進化の最
後に現れた種で、一番優れた生物であるかのような印象を受ける。

もちろん、進化の最後に現れた種は、ヒトでもニワトリでもない。というか、コイもカエルも
ヒトもイヌもトカゲもニワトリも、すべて今生きている種だ。だから、みんな進化の最後に現れ
た種ともいえる。コイもカエルもヒトもイヌもトカゲもニワトリも、生命が ^b タンジヨウしてか
らおよそ四十億年という同じ長さの時間を進化してきた生物なのだ。そして、陸上生活という点
から見れば、この系統樹の中で一番優れた種はトカゲとニワトリなのである。

もしも「走るのが速い」ことを「優れた」というのなら、一番優れた生物はイヌだろう。「泳
ぐのが速い」のはコイだろうし、「計算が速い」のはヒトだろう。何を「優れた」と考えるかに
よって、つまり何を「進歩」と考えるかによって、生物の順番は入れ替かわるのだ。

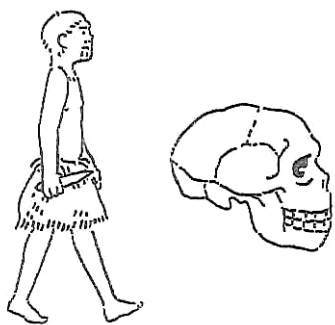
さっきは「陸上生活に適した」ことを「優れた」と考えたが、「水中生活に適した」ことを「優
れた」と考えれば、話は逆になる。トカゲは、陸上生活に適した特徴が **A** したが、それは水
中生活に適した特徴が **B** したことを意味する（ちなみに **B** の反対は、 **C** ではなく

A である。生物の持つ構造が小さくなくなり単純になったりするものが B で、大きくなくなり複雑になったりするものが A だ。退化も発達も進化の一種である。「水中生活に適した」ことを「優れた」と考えれば、もちろん一番優れた生物はコイになる。

いろいろと考えてみると、客観的に優れた生物というものは、いけないことがわかる。陸上生活に優れた生物は、水中生活に劣った生物だ。走るのに優れた生物は、力に劣った生物だ。チーターのように速く走るためには、ライオンのような力強さは諦めなくてはならないのだ。

そして、計算が得意な生物は、空腹に弱い生物だ。脳は大量のエネルギーを使う。キカンである。私たちヒトの脳は体重の二パーセントしかかないにもかかわらず、体全体で消費するエネルギーの二〇〜二五パーセントも使ってしまう。大きな脳は、どんどんエネルギーを使うので、その分たくさん食べなくてはいけない。もしも飢饉が起きて農作物が取れなくなり、食べ物が無くなれば、脳が大きい人から死んでいくだろう。だから食糧事情が悪い場合は、脳が小さい方が「優れた」状態なのだ。

実際、人類の進化を見ると、脳は一直線に大きくなってきたわけではない。ネアンデルタール人は私たちヒトより脳が大きかったけれど、ネアンデルタール人は絶滅し、私たちヒトは生き残った【図2】。その私たちヒトも、最近一万年ぐらいは脳が小さくなるように進化している。これらの事実が意味することは、^②脳は大きければ良いわけではないということだ。



【図2】ネアンデルタール人

「ある条件で優れている」ということは「別の条件では劣っている」ということだ。したがって、あらゆる条件で優れた生物というものは、理論的にありえない。そして、あらゆる条件で優れた生物がいらない以上、進化は進歩とはいえない。生物は、そのときどきの環境に適応するように進化するだけなのだ。

生物が進化すると考えた人はダーウィン以前にもたくさんいた。でも、チェンバーズもスペンサーも、みんな進化は進歩だと思っていた。^③進化が進歩ではないことを、きちんと示したのは、ダーウィンが初めてなのだ。それではダーウィンは、なぜ進化は進歩でないと気づいたのだろう。進化が進歩ではないとダーウィンが気づいた理由は、生物が自然選択によって進化することを発見したからだ。ここで間違えやすいことは、自然選択を発見したのはダーウィンではないということだ。ダーウィンが発見したのは「自然選択」ではなくて「自然選択によって生物が進化すること」だ。

自然選択について簡単に説明しておこう。自然選択は二つの段階から成る。

一つ目は、遺伝する変異（遺伝的変異）があることだ。走るのが速い親に、走るのが速い子どもが生まれる傾向があれば、走る速さの違いは遺伝的変異である。一方、トレーニングで鍛えた筋肉は子どもに伝わらないので、それは遺伝的変異ではない。

二つ目は、遺伝的変異によって子ども数の違いが生じることだ。つまり、走るのが遅い個体

より、走るのが速い個体に子どもがたくさんいる場合などだ。ここでいう子どもの数は、単に生まれる子どもの数ではない。生まれた後にどのくらい生き残るかも、考えに入れなくてはならない。具体的には、親の年齢^{ねんれい}と子どもの年齢を同じにして数えればよい。たとえば、親の数を二十五歳^{さむい}の時点で数えたら、子どもの数も、二十五歳まで生き残った子どもで数えればよいのだ。この二つの段階を通れば、子どもの数が多くなる遺伝的変異を持った個体が、^④自動的に増えていく。考えてみれば、自然選択なんて簡単だ。要するに、走るのが速いシカより、走るのが遅いシカの方が、ヒョウに食べられて減っていくということだ。そんなこと、誰^{だれ}だって気づくだろう。実際、その通りで、『種の起源』が出版される前から、生物に自然選択が働いていることは常識だった。当時、進化に興味がある人なら、誰^{だれ}だって知っていた。それなのに、どうしてダーウィンが自然選択を発見したように、ゴカイ^dされているのだろうか。

実は、自然選択はおもに二種類に分けられる。安定化選択と方向性選択だ。

安定化選択とは、平均的な変異を持つ個体が、子どもを一番多く残す場合だ。たとえば、背が高過ぎたり、反対に背が低過ぎたりすると、病気になりやすく子どもを多く残せない場合などだ。この場合は、中ぐらいの背の個体が、子どもを一番多く残すことになる。つまり安定化選択は、

I のである。

一方、方向性選択は、^{きんたん}極端な変異を持つ個体が、子どもを多く残す場合だ。たとえば、背が高い個体は、ライオンを早く見つけられるので逃げのびる確率が高く、子どもを多く残せる場合などだ。この場合は、背の高い個体が増えていくことになる。このように方向性選択は、

II のである。

ダーウィンが『種の起源』を出版する前から、安定化選択が存在することは広く知られていた。つまり当時は、自然選択は生物を進化させない力だと考えられていたのである。ところが、ダーウィンはそれに加えて、自然選択には生物を進化させる力もあると考えた。ダーウィンは、方向性選択を発見したのである。

方向性選択が働けば、生物は自動的に、ただ環境に適応するように進化する。たとえば気候が暑くなったり寒くなったりを繰り返すとしよう。その場合、生物は、暑さへの適応と寒さへの適応を、何度でも繰り返すことだろう。生物の進化に目的地はない。目の前の環境に、自動的に適応するだけなのだ。こういう進化なら明らかに進歩とは無関係なので、進化は進歩でないとダーウィンは気づいたのでだろう。

地球には素晴らしい生物があふれている。小さな細菌^{さいきん}から高さ一〇〇メートルを超す巨木^{きよぼく}、豊かな生態系はぐくむ土壌^{どじょう}を作る微生物^{びせいぶつ}、大海原^{おあなばら}を泳ぐクジラ、空を飛ぶ鳥、そして素晴らしい知能を持つ私たち。こんな多様な生物を方向性選択は作り上げることができるのだ。もしも進化が進歩だったり、世界が「存在の偉大な連鎖^{れんさ}」だったりしたら、つまり一直線の流れしかなかったら、これほどみごとな生物多様性は実現していなかっただろう。私たちが目^⑤にしている地球^⑤上の生物多様性は、「存在の偉大な連鎖」を越えたものなのだ。

(更科 功 『若い読者に贈る美しい生物学講義―感動する生命のはなし』より)

問1 —— 線 a ～ d のカタカナを漢字で書きなさい。

問2 —— 線①「陸上生活に適應する進化的変化」についての説明として、「ヒト」の進化の過

程にもあてはまるものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 有害なアンモニアを尿素より毒性の低い尿酸に作り変えることで水辺から離れることができるようになり、胚を羊膜卵により乾燥から防げるようになった。
- 2 有害なアンモニアを尿素により完全に無毒化し、羊膜卵の外側に殻を作ることによって胚を乾燥から守り、より水辺から離れて生活できるようになった。
- 3 有害なアンモニアを尿素に作り変えることでより毒性を弱め、水中に卵を産む代わりに羊膜卵によって乾燥から胚を守ることができるようになった。
- 4 有害なアンモニアを尿酸に作り変えることで尿の排出にほとんど水をつかわなくて済むようになり、羊膜卵によって胚の乾燥を防げるようになった。

問3 空らん

A

 ～

C

 には「進化」「退化」「発達」のいずれかのことが入ります。そ

の組み合わせとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- | | | | | | |
|--------|------|------|--------|------|------|
| 1 A：進化 | B：退化 | C：発達 | 2 A：発達 | B：退化 | C：進化 |
| 3 A：退化 | B：退化 | C：進化 | 4 A：発達 | B：進化 | C：退化 |

問4 —— 線②「脳は大きければ良いわけではない」が表していることとして最もふさわしいも

のを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 脳が小さい方が食糧事情の影響を受けにくいということ。
- 2 脳が大きくなると陸上生活に支障をきたすということ。
- 3 脳が小さいほど運動能力が発達しているということ。
- 4 脳が大きくなるとさらなる進歩を遂げることが困難だということ。

問5 —— 線③「進化が進歩ではないことを、きちんと示したのは、ダーウィンが初めてなの

だ」とありますが、それまでと異なりダーウィンは進化についてどのように考えたのですか。文中から二十二字でぬき出し、はじめと終わりの四字で答えなさい。

問6 ——線④「自動的に増えていく」とありますが、その例として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 遺伝的に遠くが見える目を持った個体が、外敵の攻撃を避けながら、結果として多くの個体を残していく。
- 2 遺伝的に多くの子どもを産める個体ほど、生存競争に有利なため、結果として多くの個体を残していく。
- 3 遺伝的に小さな体型の個体でさえ、別の特徴を持った個体と共存し、結果として多くの個体を残していく。
- 4 遺伝的に走ることが苦手な個体でも、敵から身を守る方法を習得し、結果として多くの個体を残していく。

問7 空らん I II に入ることばとして最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

- 1 生物を変化させるように働く
- 2 生物を進歩させるように働く
- 3 生物を変化させないように働く
- 4 生物を進歩させないように働く

問8 ——線⑤「地球上の生物多様性は、『存在の偉大な連鎖』を越えたものなのだ」とありますが、それはどういうことですか。本文全体の内容をふまえた上で、最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 生物の多様性は、自然選択という平均的な変異をくりかえす単純・下等な生物がより多くの子どもを残すことでもたらされたということ。
- 2 生物の多様性は、単純・下等な生物が環境の変化に応じて複雑・高等な生物へと直線的に進化することでもたらされたということ。
- 3 生物の多様性は、生物の中でより単純・下等なものは滅び、生き残ったものが必然的に複雑・高等なものばかりとなる進歩をとげることでもたらされたということ。
- 4 生物の多様性は、単純・下等から複雑・高等へと生物が進歩を続けてきた結果ではなく、それぞれの生物が環境に適應するために進化を繰り返すことでもたらされたということ。

2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

青年の時は、だれでもつまらないことに熱情をもつものだ。

その頃、地方のある高等学校にいた私は、毎年初夏の季節になると、きまって一つの熱情にとりつかれた。それは何でもないつまらぬこと^①で、ある私の好きな夏帽子を、被^{かぶ}つてみたいという願^{ねが}いである。その好きな帽子というのはバナマ帽でもなくタスカンでもなく、あの海老茶色のリボン^{えびちやいろ}を巻いた、[※]一高の夏帽子だったのだ。

どうしてそんなにまで、あの学生帽子が好きだったのか、自分ながらよく解^{わか}らない。多分私は、その頃愛読した森鷗外氏の『青年』や、夏目漱石氏の学生小説などから一高の学生たちを連想し、それが初夏の青葉の中で、上野の森などを散歩している、彼等^{かれら}の夏帽子を[※]表象させ、連想心理に結合したためであろう。

とにかく私は、あの海老茶色のリボンを考え、その書生帽子を思うだけでも、ふしぎになつかしい独逸^{ドイツ}の戯曲[※]、アルト・ハイデルベルヒを連想して、夏の青葉にそよいでくる海の郷愁^{きやうしゅう}を感じたりした。

その頃私のいた地方の高等学校では、真紅色^{しんくしやく}のリボンに二本の白線を入れた帽子を、一高に準じて制定していた。私はそれが厭^{いや}だったので、白線の上に赤インキを塗^ぬりつけたり、真紅色の上に紫絵具^{むらさきえのぐ}をこすつたりして、無理に一高の帽子に紛^{まぎ}らしていた。だがどうとう、熱情が押えがたくなってきたので、ある夏の休暇^{きゅうか}に上京して、本郷の帽子屋から、一高の制定帽子を買ってしまった。

しかしそれを買った後では、つまらない悔恨^{かいこん}にくやまされた。そんなものを買ったところで、実際の一高生徒でもない自分が、まさか気恥^{きは}ずかしく、被^かつて歩くわけにもいかなかったから。

私は人のいないところで、どこか内証^{ないしよ}に帽子を被り、鷗外博士の『青年』やハイデルベルヒを連想しつつ、自分がその主人公である如く、空想裏^{くうそうり}の悦楽^{えつらく}に耽^{ふけ}りたいと考えた。その強い欲情は、どうしても押えることができなかった。そこで、ある夏、七月の休暇になると同時に、ひそかに帽子[※]を行李^{りょうり}に入れて、日光の山奥^{やまおく}にある中禅寺の避暑地^{ひしよち}へ行った。^②もちろん宿屋は、湖畔^{こはん}のレーキホテルを選定した。それは私の空想裏に住む人物としても、当然選定さるべきの旅館であった。

ある日私は、付近の小さな滝^{たき}を見ようとして、一人で夏の山道を登っていった。七月初旬の日光は、青葉の葉影^{はかげ}で明るくきらきらと輝^{かがや}いていた。

私は宿を出る時から、思い切つて行李の中の帽子を被っていた。こんな寂しい山道では、もちろんだれも見ることがなく、気恥^{きは}ずかしい思いなしに、勝手な空想に耽^ふれると思つたからだ。夏の山道には、いろいろな白い花が咲^さいていた。私は書生袴^{ぼかま}に帽子を被り、汗ばんだ皮膚^{ひふ}を感じながら、それでも右の肩^{かた}を高く怒^{いか}らし、独逸学生の青春氣質を表象する、あの浪漫的^{ろうまんてき}の豪壯^{ごうそう}を感じつつ歩いていた。^A懐中^{かいちゆう}には丸善で買ったばかりの、なつかしいハイネの詩集が入っていた。その

詩集は索引の鉛筆で汚されており、所々に凋れた草花などが押されていた。

▼ 山道の行きつめた崖を曲った時に、ふと私の前に歩いていく、一個の明るいパラソルを見た。たしかに姉妹であるところの、美しく若い娘であった。私は何の理由もなく、急に足がすくむようにはずかしさと、一人でいるさまりの悪さを感じたので、歩調を早めながら、わざと彼等の方を見ないようにし、特別にまた肩を怒らして追いぬけた。どんな私の様子からも、彼等に対して無関心でいることを装おうとして、無理な努力から固くなっていた。そのくせ内心では、こうした人気のない山道で、美しい娘等と道づれになり、一口でも言葉を交わえられることの悦びを感じ、空想の有り得べき幸福の中でもじもじしながら。

私は女等を追い越しながら、こんな絶好の場合に際して機会を捕えなかったことの愚を心に悔いた。

だが丁度その時、偶然のうまい機会が来た。私が汗をぬぐおうとして、ハンケチで額の上をふいた時に、帽子が頭からすべり落ちた。それは輪のように転がって行って、すぐ五六歩後から歩いてくる、女たちの足許に止まった。若い方の娘が、すぐそれを拾ってくれた。彼女は恥じる様子もなく、快活に私の方へ走ってきた。

「どうも……どうも、ありがとう。」

私はどぎまぎしながら、やっと口の中で礼を言った。そして急いで帽子を被り、逃げ出すようにすたすたと歩き出した。宇宙が真赤に回転して、どうすればいいか解らなかった。ただ足だけが機械的に運動して、むやみに速足で前へ進んだ。

だがすぐ後の方から、女の呼びかけてくる声を聞いた。

「あの、おたずねいたしますが……」

それは姉の方の娘であった。彼女はたしかに、私よりも一つ二つ年上に見え、※伶俐な美しい瞳をした女であった。

「滝の方へ行くのは、この道でいいのでしょうか？」

③ そう言つて慣れ慣れしく微笑した。

「はあ！」

私は窮屈に四角ばって、兵隊のような返事をした。女は暫らく、じつと私の顔を眺めていたが、やがて世慣れた調子で話しかけた。

「失礼ですが、あなた一高のお方ですね？」

私は一寸返事に困った。

「いいえ」という否定の言葉が、直ちに瞬間に口に浮かんだ。けれども次の瞬間には、帽子のこゝとが頭に浮かんで、どきりと冷汗を流してしまった。私は考える余裕もなく、混乱して曖昧の返事をした。

④ 「はあ！」

「すると貴方は……」

女は浴びせかけられるように質問した。

「秋元子爵の御息ですわね。私はよく知っていますわ。」

私は今度こそ大きな声で、はつきりと返事をした。

「いいえ。ちがいます。」

けれども女は、なお疑い深そうに私を見つめた。ある理由の知れないはにかみと、不安な懸念
とにせき立てられて、私は女づれを後に残し、速足ですんずんと先に行ってしまった。▲

私がホテルに帰った時、偶然にもその娘等が、隣室の客であることを発見した。彼等はその年
老いた母と一緒に、三人でここに来ていた。いろいろな反復する機会からして、避けがたく私は
その女づれと懇意になった。遂には姉嬢と私だけで、森の中を散歩するような仲にもなった。
その年上の女は、明らかに私に恋をしていた。彼女はいつも、私のことを『若様』と呼んだ。

私は最初、女の無邪気な意地悪から、悪戯に言うのだと思ったので、故意と勿体ぶった様子な
どして、さも貴族らしく返事をした。だがある時、彼女は真面目になって話をした。ずっと前か
ら、自分は一高の運動会やその他の機会で、秋元子爵の令息をよく知ってること。そして私こ
そ、たしかにその当人にちがいがなく、どんなにしばらく隠れていても、自分には解ってる
ということ、女の強い確信で主張した。

その強い確信は、私のどんな弁駁でも、撤回させることができなかつた。しまいには仕方が
なく、私の方でも好加減に、華族の息子としてふるまっていた。

最後の日が迫って来た。

かなかな蝉の鳴いてる森の小路で、夏の夕景を背に浴びながら、女はそっと私に近づき、胸の
秘密を打ち明けようとする様子が見えた。私はその長い前から、自分を偽っている苦悩に耐えな
くなっていた。自分は一高の生徒でもなく、いわんや貴族の息子でもない。それに凶々しく制
帽を被り、いい気になって『若様』と呼ばれている。どんなに弁護して考えても、私は不良少年
の典型であり、彼等と同じ行為をしているのである。

私は悔恨に耐えなくなつた。そして一夜の中行李を調べ、出発しようと考えた。

翌朝早く、私は裏山へ一人で登った。そこには夏草が繁っており、油蝉が木立に鳴いていた。

私は包から帽子を出し、双手に握ってむしり切つた。

麦藁のべりべりと裂ける音が、不思議に悲しく胸に迫つた。その でさえも、地面の泥に
まみれ、私の下駄に踏みつけられていた。

（萩原朔太郎『夏帽子』全文）

〈なお、問題を作成するにあたり、かなづかいと用字を改めました。〉

※一高……旧制第一高等学校。東京大学教養学部の前身であり、当時の学生の憧れの存在であった。

※表象……象徴。イメージ。

※戯曲……演劇の脚本形式で書かれた文学作品。

※行李……旅行用の荷物入れ。

※怜悯……頭の働きがすぐれていてかしこいこと。

※弁駁……他人の説が間違っていると攻撃して言いやぶること。

問1 ——線A「懐中」、B「懇意」、C「いわんや」の意味として最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

A「懐中」	1 着物の中	2 カバンの中		
	3 思い出の中	4 帽子の中		
B「懇意」	1 相席	2 恋愛関係		
	3 親しい間柄	4 険悪な関係		
C「いわんや」	1 絶対に	2 また	3 ただ	4 まして

問2 ——線①「ある私の好きな夏帽子を、被ってみたいという願いである」とありますが、「私」はこの夏帽子が好きな理由をどのように自己分析していますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 憧れの一高生の夏帽子に見立てて自分の高校の学生帽を身につけてみたけれども、熱情を満たせなかったため。
- 2 夏の青葉や海の郷愁を感じるたびに一高生の姿が思い出され、彼らの象徴的な夏帽子が真つ先に思い浮かんだため。
- 3 独逸の戯曲を読むことで夏の一高生の姿や彼らの帽子を連想し、なつかしさや夏の清らかさを感じたため。
- 4 一高生の夏帽子は、自分が好んで読んでいる小説やそこに登場する人物とその情景を思い起こさせるものだと感じたため。

問3 ——線②「もちろん宿屋は、湖畔のレーキホテルを選定した」とありますが、どうして「私」は「もちろん」レーキホテルを選んだのですか。文脈から「レーキホテル」がどのようなホテルであるかを考えた上で、最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 人の目を気にしなくていい場所にあるだけでなく、「私」が負い目と高揚感こうようかんの両方を隠して泊まるとどには一番ふさわしいホテルだと思ったから。

2 人の目を気にしなくていい場所にあるだけでなく、「私」が憧れる作品の主人公のような人物であれば、選ぶであろうホテルだと思ったから。

3 つまらない悔恨をいやしてくれる場所であるだけでなく、「私」が一高生を装った場合にもつとも色々な人と出会えるホテルだと思ったから。

4 つまらない悔恨をいやしてくれる場所であるだけでなく、「私」が憧れる一高生が宿泊しゆくはくする場所としては日光で唯一ゆいいつのホテルだと思ったから。

問4 文中の▼印から▲印までの間で姉妹と出会った「私」の気持ちの高ぶりを隠喩いんご(暗喩)を用いて表現している部分があります。この部分を十字以内でぬき出しなさい。

問5 ——線③・④「はあ！」とありますが、その説明として最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

1 ふてくされた気持ちがこもった返事としての「はあ！」

2 内容がよくわからないことに対しての疑念の「はあ！」

3 緊張きんちやうして余裕がないなかで肯定こうていしようとした「はあ！」

4 相手に好意を表現するための親愛の情を示す「はあ！」

5 自身の思いが相手に通じなくてやりきれない「はあ！」

6 返答が明確にまとまらない中でとっさに出た「はあ！」

問6 ——線⑤「私は女づれを後に残し、速足でずんずんと先に行ってしまった」とありますが、どうして「私」はこのようにしたのですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 美しい女性に興味を持たれたことへのはずかしさに加えて、これ以上彼女たちに関わっている自分の素性が明らかになってしまうことへのおそれがあったから。
- 2 美しい女性と関わり合いが持てたことはうれしく思う一方で、自身のついた嘘が彼女たちに確実に悟られてしまうと感じわづらわしくなったから。
- 3 美しい女性と知り合えて楽しい気持ちも感じてはいたが、これ以上彼女たちに関わっていると自分の本来の目的が果たせなくなってしまいそうで憂鬱に感じたから。
- 4 美しい女性が自分のことを疑いのまなざしで見ていることを苦々しく思った上に、今後一高生の帽子をかぶっていることを馬鹿にされると思い悔しくなったから。

問7 ——線⑥「令息」とありますが、この時の「令」の漢字の意味として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 お金持ちの
- 2 指示される
- 3 立派な
- 4 平和な

問8 空らん にあてはまることばを文中より八字でぬき出しなさい。

問9 この文章から読み取れる「私」の心情や行動の説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 「私」は当初、夏帽子をかぶることによって一高生の気分にはたりひそかな満足感を味わっていたが、道づれになった女性の勘違いをきっかけとして、満足感がだんだんと罪悪感へ変わっていったために、夏帽子を破ってしまった。
- 2 「私」は当初、夏帽子をかぶることによって一高生として振る舞うことができると信じていたが、道づれになった女性の勘違いをきっかけとして、自分は一高生としての資格がないことに気づき、夏帽子を憎く思うようになった。
- 3 「私」は当初、夏帽子をかぶることによって一高生になりきって大いに満足していたが、道づれになった女性の勘違いをきっかけとして、逆に帽子だけでは人をひきつけ続けられないと気づき、夏帽子を泣く泣く手放すこととした。
- 4 「私」は当初、夏帽子をかぶることによって一高生の雰囲気にはたって気持ちよく過ごしていたが、道づれになった女性の勘違いをきっかけとして、逆に夏帽子がなければ旅を楽しむことができたと思い、八つ当たりをしてしまった。

3 次の【A】～【I】の作品にはすべて「雪」が出てきます。これらを読んで、後の問いに答えなさい。

【A】

幼年時

私の上に降る雪は

真綿のようでありました

少年時

私の上に降る雪は

曇みぞれのようでありました

十七—十九

私の上に降る雪は

霰あられのように散りました

二十一—二十二

私の上に降る雪は

雹ひょうであるかと思われた

二十三

私の上に降る雪は

ひどい吹雪ふぶきとみえました

二十四

私の上に降る雪は

※ いとしめやかになりました……

(中原中也「生おい立ちの歌 I」)

※ ……ごとごと。

【B】

太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。
次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。

(三好達治「雪」)

【C】 田子の浦にうち出でてみれば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ 山部赤人

【D】 朝ぼらけありあけの月と見るまでに吉野の里にふれる白雪 坂上是則

【E】 いざさらば雪見にころぶ所まで 松尾芭蕉

【F】 いくたびも雪の深さを尋ねけり 正岡子規

【G】 雪残る頂ひとつ国境 正岡子規

【H】 雪の夜の紅茶の色を愛しけり 日野草城

【I】 ゆきふるといひしばかりの人しづか 室生犀星

問1 【A】のような詩の形式を何とといいますか。次から一つ選び、番号で答えなさい。ただし、「幼年時」のような小見出しは考えに入れないものとします。

- 1 文語定型詩 2 文語自由詩 3 口語定型詩 4 口語自由詩

問2 【A】について、「私」の身の上の変化を説明したものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 「私」は幼年時からどの年代でも幸福とはいえない身の上であった。
2 「私」は成長するにしたがって、不辛になりつづけていった。
3 「私」は少年時から困難を背負ったが二十代半ばでやや落ち着いた。
4 「私」は幸福な時期と不幸な時期を何度もくりかえす生活を送った。

問3 【B】で使われている表現技法として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 体言止め 2 倒置法 3 擬人法 4 対句法

問4 【C】と【D】はともに、藤原定家が飛鳥時代から鎌倉時代までの名歌を選んで編んだ歌集に収められている歌です。その歌集の名前(通称)を漢字四字で答えなさい。

問5 【E】～【I】の中で、よまれた季節が一つだけ異なるものがあります。その記号と、よまれた季節を春夏秋冬の漢字一字で答えなさい。

問6 次の①～③は、【C】～【I】のいずれかについて説明したものです。どれについてものか考え、それぞれC～Iの記号で答えなさい。

① 作者は病気をわずらっており、思うように外出できない中でよまれた作品。作者のもどかしさがよくあらわれている。

② 作者の動きとともに雄大な景色が目の前にひらけていく印象の作品。字あまりが独特のリズム感を生み出している。

③ 家の中で女性と二人で対面している場面をよんだ作品といわれている。特徴のある表記法がやさしさを生んでいる。

問7 「雪」という漢字の部首名をひらがなで書きなさい。

問8 次の①～③の文について、「雪」を使ったことばの使い方が正しければ○、あやまっていれば×で答えなさい。

① 「ほたるの光、窓の雪」という歌詞のとおり、かれはまずしいながらもけんめいに働く少年時代を送った。

② 母はしんの強さだけでなくしなやかで人あたりがよいという一面がある、柳に雪おれなしという人物だ。

③ A国とB国の首脳が会談した結果二人の主張は平行線となり、両国の関係は歴史的雪どけにおちいった。

